県　内　の　産　業（その22）

――準戦時における経済の推移――

横　須　賀　　弘

昭和初期全世界を襲つた恐慌からわが国が他国にさきがけて脱出できたのは、軍需インフレとそれにともなう経済の合理化によるものとされております。すなわち、満洲事変以後の公債発行による軍事業等の莫大な支出によつて、工業生産は、急上昇し、産業構造も軽工業部門から重工業部門の比重が高まり、旧来の財閥のほか重化学工業を基礎とした新興財閥つまり大企業の誕生をみたのであります。しかし産業資本の不足から中小工業を下請工業として利用し、相当の成績をあげ得たのであります。現在、わが国の二重構造はここに大企業を中心として根強く根をおろしたといつても過言ではないでしよう。

また当時の為替切下げは中小企業の低賃金とともに輸出を伸張させ、工業の軍事化に必要な原料・機械等の輸入を可能にしたのであります。

以上が、昭和6年から12年にいたる国内経済の概観でありますが、その期間の工業統計をみてみますと、2つの期間の傾向に対する1つの転換期を示しております。すなわち、大正末期から昭和6年までの不況と後退時に対して、昭和5年恐慌前のピークである昭和4年と比較しますと、工業統計の生産額は昭和8年には昭和4年の水準を回復しているのであります。本稿のはじめに恐慌を他国にさきがけて脱出したと申しましたが、事変当時全世界の資本主義国が恐慌の泥沼にあえいでおつたのですがアメリカを例にとりましても、昭和4年の水準に回復したのは昭和12年であつたのであります。それでは、どうしてわが国が、この泥沼のような不況のなかから抜け出ることができたのでしよう。

それは満洲事変に始まり、以後続いた軍需インフレと、金輸出再禁止を転機とする輸出額の増加、それにともなう経済の回復・生産の増進等であつたのであります。すなわち、前者はわが国の国防上の見地から重化学工業部門の生産活動を必要とし、特需関連産業の生産が活発化したのであります。また、後者は特に繊維製品・雑貨等を中心とした輸出が急速に伸長し、その結果産業活動は振興をみ、また軍需生産のための原料輸入をもまかなうことができたのであります。それ以外に満洲に対する投資の激増による輸出増加も相当なウエイトを占めるに至つたのであります。

第1表　　生産額の推移（全国）

	生産額（百万円）		生産額構成比		生産額指数（昭6＝100.0%）
	昭　6	昭　12	昭 6	昭12	
			%	%	%
合　計	5,198.8	16,327.8	100.0	100.0	316.4
食料品	837.8	1,474.1	16.2	9.0	175.9
紡　織	2,003.5	4,459.7	38.8	27.3	222.6
製材木製品	149.6	383.8	2.9	2.4	256.5
印刷製本	176.7	273.2	3.4	1.7	154.6
窯業土石	155.5	443.9	3.0	2.7	285.5
化　学	821.8	2,900.9	15.9	17.8	353.0
金　属	479.0	3,727.5	9.3	22.8	778.2
機械器具	456.3	2,336.0	8.8	14.3	511.9
その他	79.9	328.5	1.5	2.0	411.1

資料：通産商工業統計

次に当時の生産構造をみてみますと、重化学工業の生産額の全産業額に占める比率は大正8年の25.6%から不況期には後退しながらも、昭和6年には再び上昇して29.3%までになつたのでありますが、昭和6年～12年の7ヶ年には約20%も一挙に上昇して50.6%に達したのであります。このように、生産額に関する限りわが国の産業構造は軽工業に対し、重化学工業部門のウエイトの増加がみられたのであります。

第1表の生産額構成比をみても、食料品・紡織・木材・印刷製本のいずれもその構成比は大きな減少がみられるのに対し、化学・金属・機械器具の構成比は大きな増加がみられ、とくに金属の生産額指数は昭和6年にくらべ昭和12年時において約8倍弱に達したのであります。

上述の国内工業生産額の推移と、その背後の経

済の進展に対し、県内の動向はどのように変容したでしょうか。次に工業生産額の推移をみる前に、県内全産業の動態について概観してみましょう。第2表から昭和6年時の全産業の生産額は昭和元年にくらべ67.5%と低調さをみせており、とくに林産物の49.9%がとくに悪く、農産物・鉱産物、水産物のいずれも昭和元年の生産額を下廻っており、昭和元年を上廻つているのは工産物だけという状態であります。

第2表　　産業別生産額指数
（昭和元年（大正15年）＝100.0%）

		総計	農産物	畜産物	林産物
生産額指数	大正15年 昭和元年	% 100.0	% 100.0	% 100.0	% 100.0
	昭和6年	67.5	52.9	62.1	49.9

		鉱産物	水産物	工産物
生産額指数	大正15年 昭和元年	% 100.0	% 100.0	% 100.0
	昭和6年	58.9	79.4	136.0

しかし昭和元年以降各年次別にみてみますと昭和6年を谷として以後景気回復がみられるのであります。

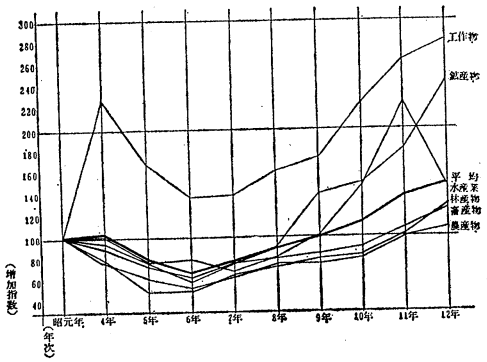
第3表　　産業別生産額指数
（昭和6年＝100.0%）

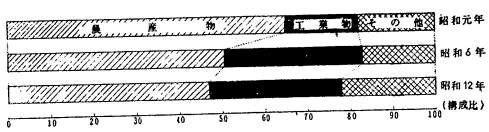
	総計	農産物	畜産物	林産物
昭和6年	100.0	100.0	100.0	100.0
昭和12年	219.8	203.1	202.0	255.9

	鉱産物	水産物	工産物
昭和6年	100.0	100.0	100.0
昭和12年	417.9	186.5	206.5

このようにして、本県の場合昭和元年に復したのは昭和10年であり、この推移は第1図のとおりであります。すなわち、工作物を除いた他の各産業はいずれも昭和元年の生産額を下廻り、鉱産物がいち早く昭和8年下期に昭和元年の水準に達し、次いで水産物でありますが、昭和11年の225.7%（昭和元年＝100.0%）をピークとして、以後減少傾向にあることが目立つております。その他の産業はいずれも上述3産業より昭和元年の水準に達するのが2年ほど遅れているのがわかりましょう。こうした工作物の意外なほどの不況に対する抵抗力がどこにあるのか、このことは後段にゆずるとして、とにかく全年平均と比較してみましても、県内産業の回復力はかなりの遅れをみせていることがわかりましょう。

第1図　産業別生産額増加指数
（昭和元年＝100.0%）



また第3表から昭和6年～昭和12年の7年間に各産業はどのように推移したかをみることができます。この表から、この期間で最も大きな生産をみせたのが鉱産物であり、昭和12年時には昭和6年にくらべ十倍に達したのであります。次いで林産物・工産物・農産物・畜産物・水産物の順となります。しかし、各産業生産額の県内総生産額に占める割合をみてみますと、昭和6年で農産物は全体の50.6%を占め、次いで工産物の32.3%を示し、この2産業で82.9%を占めているのであります。それが昭和12年には農産物は、46.8%と大きく減少し、工作物も又、30.3%で昭和6年にくらべ3.6ポイントの減少を示しております。これに対し、鉱産物は反対に昭和6年8.1%に対し、昭和12年には13.1%で、昭和6年にくらべ5ポイントの増加を示したのであります。このように農産物については昭和元年以来大きく減少を続けていることがよくわかりましょう。次号ではこうした産業構造の面からこの期間の経済の推移についてみてみましょう。

第2図　産業別構成比